

6-7.

俳諧資料カード

年代

編者
(筆者)

寛政35月18

書名

備考

(口決)

(下垣内蔵)



不易流切

お易い、桃造のあやうき道、わろかん
このお易とて、今日に流るゝ花らんわらん
流るゝ又もらん流るゝらんわらん
のえん、いんをぬく、わろ流るゝのえん
我が家の流るゝ

古易
卷之六

流り
市令漢や
系法し
流りや

是をいへばと流ひまともて生を有難く思ふ

まゝにまゝに千変万化にまゝにいつくかして作運命斗ふと

地の四方をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

地の四方をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

の時とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

様のいらまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

はまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

かゝりまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

折るをくみりておむかひふは
 折るをくみりておむかひふは
 折るをくみりておむかひふは
 折るをくみりておむかひふは

通理石

[illegible]

後、一、
 鼠の夜の禪、
 時を計、
 の解、
 さねも、
 おま、
 中

雅俗
俗中の雅
章平、
しきとし

為工雅信の梅桃古し雅之信ふき
 ぬり信ふきいすはふて新
 方ゆきと

富永の筆

世の馬のあせとあてき 信あるがまゝあふやも
 中々ちきまといふにといふ 雅俗とあやうし
 物所有のくもつともいふに 一旦雅よりあふ
 俗よりいふ 雅よりいふ 俗よりいふ 俗よりいふ
 俗よりいふ 俗よりいふ 俗よりいふ 俗よりいふ

福如新

[illegible]

あまのこころをいかに
あふれとて後世に

ともいふと調ふはまゝとてさういふ
 構へはさういふと調ふはまゝとてさういふ
 一ふた調ふとてさういふとてさういふ
 加ふ

又二つ切字入あるは方し是のなるは
 熊より中へてゝあるは古く抄の傳文は
 ありと後ちて名を付して妙なりとあり
 此の字を抄より方し抄より入あるは
 此の字を抄より方し抄より入あるは
 此の字を抄より方し抄より入あるは

夕顔や秋の色にせめてくさね
梅白——白き神のまにうけ
あま——とまのけしはあ。あけ外
ふのちのこのまにうけしはあ。あけ外
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。

新編

新編のあけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。

あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。

新編

あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。

新編

あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。
あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。あけ外。

煇
少
下
痛
之
世
人
明
也

書

月
廣
敷
の
細
工
行
己
色

新發白膏一箱
新發白膏一箱

海客不來
川上之人
不與之
交

あまのこゝろを
あまのこゝろを

指
出
島
下
垣
北
寺
中
卷

かく
山雀のこひ

けりきりきりきりきりきり

五研道志とて史姓

河
海
之
水
入
於
海
濱

以昭夏之章
併之於仁
仁之於仁
仁之於仁
仁之於仁

うゝちいそふり／＼かきまわしてはさしお

定心是成集後者之云云
定心是定心是之云云

續小治政初集後集
通三

集後傳と云ふやとて曰集後傳の意向と云ふ節と

入と云はれ、爲る收束なきを以て、我人の爲めと漢の爲めと

自とふえぬを之講の一と名目并目とそふ

造二曰
一と下とを
改不備と云ふ
字あり

如
も
あ
の
や
う
に
な
る

卷之七

世多為之

下の一ヶ月、新刊の「
 新刊の「
 新刊の「

後の金有如一丈の後の金有如一丈三由

然又日詔と陽乎ふ是くれむく詔のたまふ者
知る者一と詔にけりふりききしと平のふききし

中 詔もよひえりて 詔をきき

あふあふとあふふ 詔 44

山のふくけりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

詔も詔をききてや けりて

又あまのふりあひのまじり

山の井ふじりーれ産はあ

いふ山の井ふじりー山の井集塔本集る

あまあひのふりあひのふりあひのふりあひ

あまあひのふりあひのふりあひのふりあひ

あまあひのふりあひのふりあひのふりあひ

隠降のふり

ふりーに産は集りねじりー

あま月

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月ふじりーあま月ふじりーあま月ふじりー

あま月

少きひの族よりゆふるこの種

は所々ある時、代々も人々杯の他時、衆人の所々と

あるて、衆人の足跡を、さう位あるのまゝ、さう

別の方へ、いには、衆人の、さうある、さうある、さうある

元服——————————————————————————————

初め、親子の、さうある、衆人の、難い、さうある、さうある

時、直の、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

又和の、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

衆人の、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

と、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

い、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

と、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

時、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

時、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

時、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

時、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

天相

天相、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

面影

面影、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

親類

親類、さうある、さうある、さうある、さうある、さうある

時め附方あるは一様ふ一ふ二ふ三あり又曰
古の作の外に空境といふ附方方々あるは
多く清きものなり今あるは他を在境の
あんの境のまじふ

面風十は進るふやうに

おんと神ふは進るふやうに

桃れそ進ふ

解るるは人なり——桃の花

すまぬのまふのまき

ふくまふと衣ぬまふ

まふまふはまふまふはまふ

備後あまふまふはまふ

おんまふ

あまふまふはまふまふ

おんまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

都ふまふはまふまふ

まふまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

まふまふはまふまふまふ

あつし 橋の如くもいかに
まもも市れ出かけのいかに
是のいかにいかに便するに付く見れば
もや人出する人の用有様いかに其の文に
ふか

夫れももあれをえぬぬと
人のまももいかに情を起すに

延命司

延命をいかにあつし 橋の如くもいかに
味有る

延命

延命と目録新出するものなるに
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

はしるる橋の如くもいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

延命

延命と目録新出するものなるに
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

はしるる橋の如くもいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

延命

延命と目録新出するものなるに
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

はるきつうくわ他の遊楽さやん

飯をい〜み〜と肉とを食ふ

お通のぬき〜にききん

婦人〜田植の事とあるか〜

お通のおと遊楽さ〜とあるか〜

花堂人のよりいけ〜

一山が馬の〜茶の御牛

はよの〜い〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

か〜乗〜は横町か神め〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

お通の〜にききん〜とあるか〜

物起とまると一の者なり

妹背れ中ふくあ〜かうも

前向のまふ所とるまふ處ふ所とる前向とていふは

玉印蓮花とていふはち〜ち〜

何胸のまふふ入る葉帳

けり漏れ出〜前向の處とまふけり又山玉

こま〜や〜紫ぬ〜や〜入院者の

木尙のまふとや〜るる

の〜思や〜少〜飯喰さ〜

ま〜能得のまふま〜前向とていふは

お活

〜られお活とていふは梅柳とていふは活とていふは

白帷ふれ〜か〜

あげが〜れ〜

おま〜これとていふは〜

あけ〜は〜

おま〜おま〜

お目〜おま〜

お活〜おま〜

おま〜おま〜

おま〜おま〜

お活〜おま〜

おま〜おま〜

見せれ法

一 附合ふんばの一掃あり 雲の花集し

雲も夏印し月も秋にうつすいづこそ

ささき通ひくさるさき 柳の秋

序、しと平とはさう 秋の道徳師

秋の来るまは後のふくさるさき 秋の道徳師

るさき 秋の来るまは後のふくさるさき 秋の道徳師

一 白れなみありのふくさるさき

二 白一 意

一二 白一 意 秋の来るまは後のふくさるさき

葉をれ 秋の来るまは後のふくさるさき

さき 秋の来るまは後のふくさるさき

使も 秋の来るまは後のふくさるさき

一 附合ふんばの一掃あり 雲の花集し

三 白一 意

一 古今 秋の来るまは後のふくさるさき

波ふ 秋の来るまは後のふくさるさき

さき 秋の来るまは後のふくさるさき

又 秋の来るまは後のふくさるさき

かき 秋の来るまは後のふくさるさき

一 白れなみありのふくさるさき

四 白一 意

更し 秋の来るまは後のふくさるさき

さき 秋の来るまは後のふくさるさき

一 附合ふんばの一掃あり 雲の花集し

それ以上と云ふ人の事と云ふは言ひな
難所の所此と云ふ人なく所より来る

所合二句れ安

一節句れうらあさう二句れあふ安出まう

一層あふこのころし一れ無きはけ

猶れや何是あふれ無き

あふこのころし所ふこのころあふ二句れ安有

宵中り一たす一を押しやれ

一麻つこのころしあふこのころたふ

附二附の端

一附句あふれ物おすとさうして延向とまじ屋出の

延向とまじ屋出の人延向とまじ

おもくられ袖をけし袖あふ

一入あふとあふ屋を傷

と附合と自際せし附あふ附物とあふのあふ

あふけしとあふ屋を傷らあふ付あふとあふのあふ

一あふあふさうあふとあふのあふあふあふあふ

一とさう

二味縁川のそとあふれ門

味縁川のそとあふれ門を又あふ屋を傷のあふ

あふあふあふあふ

一人れ肉あふとあふ

一入あふとあふあふ屋を傷

と一と附くこととあふあふあふあふあふあふあふ

異名此有能人我をばさる由是等も新附録
新増し 未れ 端ふ 四ふ

征打ふ 背とり せ 腰うし
はる 背取りとけとておられ古新増し
征打打方新増し 背取り 背取り
むし 背取り 背取り 背取り
背取り 背取り 背取り 背取り

向の愛化

一向の愛化と云ふは 向と我の愛化と云ふは
てけしこまわい 向も所為 向も所為 向も所為
向も所為 向も所為 向も所為 向も所為

是弱連ふ 向の愛化

と云ふ向と自由ふ 向と自由ふ 向と自由ふ
向と自由ふ 向と自由ふ 向と自由ふ 向と自由ふ
向と自由ふ 向と自由ふ 向と自由ふ 向と自由ふ

是弱連ふ 向の愛化

是弱連ふ 向の愛化 向の愛化 向の愛化
向の愛化 向の愛化 向の愛化 向の愛化
向の愛化 向の愛化 向の愛化 向の愛化

是弱連ふ 向の愛化 向の愛化 向の愛化
向の愛化 向の愛化 向の愛化 向の愛化
向の愛化 向の愛化 向の愛化 向の愛化

網ふ 炮

前之

おふれんねーとらふ長崎新節のしら宴中の中

子
子
子
源成校衣

とふくはしきふかすけいしんむねの
けいしんむねのけいしんむねの

高橋もくそん使のたろひ
 と所れりう高橋のうへたろひ

常用此用

一、常用此用と云ふ、さあ、他、ほ、う、と、一、

三十一 小温座の巻をけむらり

上之文を焼くとも申すかやとも有て御しゑし

のみ文字にあらざるものなりけり文字より別れて

大谷小町に安河の石を安河に附くた女

三
明
案
檢

一所ふに成の事一様

皇太子御成仁

好々しいやうに

赤いもの小麻の切とろーとろいひて

[illegible]

心付わねと題の定二條わいとうてり地了是常入

又三日月の夜に

是のころのころ二日月の愛妃と書け

一 地と集とれと作と

杜の張

源曰はるく所よりあす

此
三
年
一
年
一
年

あしむめふと、すく

而
一
年
比
本
年
更
一
次

又集の撰程集れり

章子陸貞後の腹

田中久雄入道

とくとく

とくとく

二平^神 堀の山名ある

此は孝のふと所なる故なるなり

都してさげ何の者らん

はたきとてみおと小神の香におとけんと
後とて集杯ふ

あふさ河に月をを後のうしろ

まふの一字お所

一まふの一字をみる所なり

と年にもおれ山業むお

と明かあしぬもの思はれ

はたきとてみおと小神の香におとけんと
あふさ河に月をを後のうしろ
まふの一字をみる所なり

平の式面

一平の式面はるおひ方様いしはるまじき
あふさ河に月をを後のうしろ

かひれあるまじき方様いし

か便ふしき方様いし

おれしき方様いし

うしはるまじき方様いし

あふさ河に月をを後のうしろ

あふさ河に月をを後のうしろ

まふ

一まふの一字をみる所なり

あふさ河に月をを後のうしろ

市爲之市此氣也

意為瑞

一、五の力、必二内はく「角」句ありて、後ら数々これと心の
意ひふしと書いづれ、詞は是ふといへば、詞は意ひを以て
意ふありぬまゝあり

上書
此
冬
不
似
昔
之
風

はなをふりて
あまの国に
あそびに
いづる

他のえりし胃袋と似せし物なりと云ふを忘るるを
はかき唯納と好まうとは秋と云ふと古法と稱て極ぬあ

張

一、儀作、儀作附（？）と云ふは會社衣類杯と云ふ款中に
 儀の附合ミ目と云ふ條を以て所方方（？）し可ひと爲
 ぬものゝ處あるも同じ處の目と附け附けるべし等々

一、わがまのなれ
ものよそのなれ
ちのまは文を入る
けしき
あそびの島
の嬉しき

表裏

一表のれぬり裏のふり 野良傾城埋姫杯の名月恋ひ
移りしを春ふ婿に云ふ表のぬりふりあはれは是せぬりし表
はねを出ししは先づて面白くあきぬに表さるりといふ
あきぬふりし裏に云ふ

懐帛文彦小室
附白方又よむ
し
懐紙
良少好
む
し

一 附の出来附は、通流の因を、附は、ふふと云執筆あると云へし
 其時至附のや、通く、ゆの、と、附ふ、一、反、通へし、相執筆
 又、えし、同、相執筆、と、ふと、通へし、は、ふ、より、一、反
 通へし、相執筆、依りて、打越、より、ふと、ふと、亦、むし、し
 一 附の能附、古、と、通、ふ、と、直、中、通、ふ、成、は、時、ふ、通、ふ、を、や、し、と
 う、と、執筆、古、し、ふ、と、斗、と、通、ふ、

一 升 二 切 三 七 八 九

一 通底序 是時一札して利未者く之に札を又向來に之に
一 執筆 表の八月月と月と結と名當時を札をとりて筆
名表の八月月と月と結と名當時を札をとりて筆
一 通底序 是時一札して利未者く之に札を又向來に之に
一 執筆 表の八月月と月と結と名當時を札をとりて筆
名表の八月月と月と結と名當時を札をとりて筆

一、ハ習志の時、文彦、懷安と上て、一順、後、源の時、亭主、今、扇、紙、川、需、と、

文法

一、文法正法法能中業業遊遊世世對對心心性性在在一一ししもの付

点式

一、**玄** 兎角 七、**白** 小太 奉 方 七、**点** の 方、**了** 点、**二** 安 久、**合** 等、**三** 三、**思** の
 一、**も** 三、**了** 付、**了** 了、**点** 点、**八** 点、**了** 了、**の** 味、**二** 能、**授** 方、**了** 一、**了**
 白 字 七、**点** 朱 字 八、**点** 朱 長 四、**点** 朱 凡 二、**了** 了

附合雜誌

一 能 浩 所 与 与 他 人 正 与 与 世 凡 唯 信 平 如 之 信 度 者 事

和歌集此書物終不月七文

車挽如系以月盡百

附の山々を附と終る事——まきし先師此二の事か
 事有り二の事——附と終る事か
 平まぬ振さうと終る事か
 傍車と云れ元々の事と云ふ
 一 振紋、云々いりぬ、條らん
 是くや二の事と云ふ
 教入の業と云て振ひ人
 初云ふ事と云てわ——と云ふ事か
 の作あり振ひ人の作ありと云ふ事か
 末綿着る。端も云々に續てやん
 又 驚きすく——度まひ垣のまき
 着想れり——言村の
 又

是山里の屋まひ垣の事か
 又 驚きすく——度まひ垣のまき
 着想れり——言村の
 又

一々事の中一々事さく一様の事い何力なる長計ぬいし
神ふ花あふれぬ甘きさふこちうし所て大なる世を
はるる一熱て一様の事いさふあふた夫とあふた後
布し事すし

湯け山の雲けけ道新さきし
寺いふい、種、さくちゅう

はるのう打鼓ふさきうてむらう

小便紙燭いぬあけり
陳るふふき、湯けあし

又

何来れ名も湯一、花の店
いふ上の交字武王の名と方一とが中しにうた
又山玉、い

雲をあらて林ふ二日月

同いふふ他とあし、秋をほ
地を地とと親他と云ふ他はる他と云ふ
又世このもといふ集い

さう漸しとまの山の出もあれ
武老一隣えいける城の音と

年い、えん中る、浄土寺けう
川、たひ、殿、し、倒、し、後、地、し

女うし、し、れる、あ、ら、次

い、所、の、内、の、湯、や、し、所、の、寺、の、は、城、の、と、所、の、い、く、ま、あ
柄、く、後、の、お、い、り、あ、ふ、あ、と、え、を、所、の、こ

月ふいさ百反糸これ頼はるに

いふ光にやあは福の

店にすしをいふお味ふまゝの

あゝめ味のけの出来あるまゝ

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

いふお味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

来一轉に受はる

すの交定に何なり

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

てすしをいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

お味をいふお味がううう次は席をいふお味を

一と、^いちと^ひひくふくと大沢の
沈の底より流る極らん

いふのありにまぎ出すに
櫃よりあゝあいのきげん

三三の四一と添えて何の式だといふ者も
 たしてあるの省納あり

吹風の色の、ゆきふん、えつるい
社の木の葉の、おきこを、あきら

ふきのつてけきしと流く河依云

天の東海をけりて来る日なり
こまのふし

三三のり
 ちまうなるつてふさうる
 三三
 三三のり
 ちまうなるつてふさうる
 三三
 三三のり
 ちまうなるつてふさうる
 三三

君の爲に










我々小島より
是云金のて

山よりえつ我來し梅を

風
ハ
小
紅
入
ら
ぬ
可
し
後
ハ

まゝのまゝ切りの句に依ふたと云詞草。

土もあふん
 道なりき

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり
将を以て推量す。河に信えたるそと云河にあり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

あむいあんなあふむごごものそび打合たる河あり

〇 燈籠 燈籠はあつらひられらるゝとていふは詞の意。

ふもいへてほふありとて
あつらひられし夜中の月うね

そむ燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

は月夜に燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

〇 いし 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

タタラハ 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

ふもいへてほふありとて

〇 ここの 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

とていふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。

これのや 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

生かしのとていふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。

〇 とも 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

いふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。

里人のとていふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。

東四轉 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

〇 とも 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

うのよの 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

花より又人のとていふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。

沙とていふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。

〇 まて 燈籠はあつらひられしとていふは詞の意。

いふは詞の意。あつらひられしとていふは詞の意。



二つの義有一つは、
 かくのふゝ常のふゝ何事も
 昨とあるてふとをいして
 昨と病をいふとをいふ
 常のふゝか

いよほし我身とあとしうく

海王の薙草小

之の候あり一たびふぬふのまじり常のまじ
 何れも作とあるまじりてふより力
 強しと知合

夜半をわく袖をたたく
あまのうねり

上と同一く分限を有する
 係云のうゝと云ふ均等。

し

あきらまたちし
いりくもあもはるるる

中五轉之字仍念

この乾の河と云ふ。てふと云てあるの河と
ある一轉將乾の河とある事。何。い。何。あるの乾
に屬するものなり。

七

か衣たのりきうじねの
あきく申けぬまゝを

梅うきふなりおるをふすひせむ
ちふふいふくわさくわくす

三 己然り急の詞とあるてふも
大畠氏の急あり。

結く運ぶともかくぬき常盤山
余ふのふふと凡そかーる

の上
上このあふ何とに結り知の何とある
てふに候く

りやうれおるにあふと一と
夜やうけあらん袖のあふる

一将
とくふふとあふとすまの浦ふ
とくふふとあふとすまの浦ふ

和田の東へ海かけくあふとすまの浦ふ
人あふとすまの浦ふ
四條に活よのり知とあふとすまの浦ふ
備ふるあり

一将のあふぬひ
あふぬふとあふとすまの浦ふ
人のあふぬふとあふとすまの浦ふ

むがこのあふとあふとすまの浦ふ
とあふとあふとすまの浦ふ

二將のあふ疑

堀にあふたあふとあふとすまの浦ふ
甲あふとあふとすまの浦ふ

年とあふとあふとすまの浦ふ
いけあふとあふとすまの浦ふ

○二將のあゝんれの詞として一將のあんよも
かつくちあつたふと——とあし

らんせあもやあゝんれあゝんれ
はれあゝんれあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ

○二將の収ちを

玉の流し絶え収ちを
あゝんれあゝんれあゝんれ

○二將のあつたふと——とあし
あゝんれあゝんれあゝんれ

あゝんれあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ

あゝんれあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ

○愛格きき——とあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ

あゝんれあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ

あゝんれあゝんれあゝんれ
あゝんれあゝんれあゝんれ

三糖のうめいヨリあてまゝに酒りく
うむしき不の意なり信玄のまゝいと
いふゆふ南。

大カ

あそいあときあふぬ酒しとむてか酒き取
こぞし知の酒ふあさぬあふり不純と
知るし信玄はこゝに信こそといふ酒なる
事と信もあふりいそさる時鳥酒と信むるの
あしとち略その信は

あつとあふ酒しと信玄のまゝに酒りく
ありとあふりふさるのあふり

そも事とさうていふ酒しと信玄のまゝに酒き取
ありあふ事とさうてあふり信と信むる
不云

のこして信玄のまゝに酒りく
又あふりひたつてのこといふ酒に信す
あふりあふりしは信の酒と信は信り
まのひたふあふり信は信り
かかられあふりあふり

やのあま多しといふまゝに酒りく
反信のや疑のやのこゝに酒りく
疑のや

信は信しといふまゝに酒りく
あふりあふりあふり

反信のや

信は信しといふまゝに酒りく
あふりあふりあふり

何のかりきり多し

何れより好む所なり

はれき何れに属する所の法を定めしむるは

世に中じつとせしむるなり

の

さうぞう常の法にあらざるものなりとせしむるは

常よりあるものなりとせしむるは

常理門にあらざるものなり

常の法なり

はる別の法にてあらざるものなり

常の法にあらざるものなり

常の法にあらざるものなり

も

常の法にあらざるものなり

常の法にあらざるものなり

常の法にあらざるものなり

常の法にあらざるものなり

いはらう時をくふのあへかへん
そふらうしんぞの代も終ぬ

唯格の空無二可といふ
切の洞の空を格

空を格
空を格

空を格

空を格
空を格

